






泥団子作り

くりの木幼稚園（千葉県柏市）



子ども達は水、砂、泥といった身近にある容易に変化する素材とのかかわりを通して、考える力、発想力が養われていく水遊び、泥遊びを、盛んに楽しんでいる。幼稚園には様々な遊びがあるが、これほどいろいろな遊び方が出来るものは他の遊びや活動を探してもなかなか見付けることが出来ない。

“泥団子作り”の実践

事例1：どこの土で作ると固い（又はピカピカの）団子が出来る？

子どもの言葉、気付き	状況
<p>「水を入れなくてもぎゅーってすれば固まるね」 「まん丸にならない。デコボコになっちゃう」 「水をいっぱい入れるとドロドロになっちゃうぞ」 「サラサラなのに水を入れるとドロドロ、不思議だよ」</p> <p>「砂に水を入れてギュッとすると丸いのが出来るね」 「ザラザラしててツルツルにならない」 「強く握ってもすぐ壊れちゃう」 「固まらない！」 「団子が乾くと砂に戻っちゃう」</p> <p>5歳児が「混ぜてみたらどうかな？」とひと言。黒土と砂場の砂を混ぜ、握ってみるとグニグニして固まらない。それぞれの割合を変えながら何度も挑戦する。一人ひとりが「混ぜるときは砂場の砂を多くしてね」「そんなに畑の土入れたら固まらないよ」「ギュって水を絞ると固くなるんだよ」「団子を砂に埋めると早く固まるよ」「それじゃ砂がいっぱい付いてまん丸にならないよ」と意見を出し合い、頷いたり驚いたりしている。</p>	<p>畑(黒土...関東ローム層の風化したもの)で作る。</p>   <p>砂場や園庭の砂に水を入れて作る。</p>   <p>やの方法ではピカピカにならず、様々な問題点があることが分かった。両方をミックスする。それぞれの配分は砂場の砂6割、畑の土が4割といったところでバランスしていた。</p> 

事例2：どうやったらピカピカになる？

子どもの言葉、気付き・保育者の言葉(青字)	状況
<p>「サラ砂かけたらどう？」 「何回かけるの？」 「団子が白っぽくなるまで」 「水をつけて擦ったらツルツルになるんじゃない？」 「手で擦ったら光ってきたよ！」 「擦ったら壊れた！力入れすぎたかな？」 「あまり大きいのが作ると壊れやすいよ」 「炭を付けるとツルツルになるって、パパが言った」 「壊れても大丈夫なようにもう一個(予備を)作っておこう」</p>	<p>硬く締まった団子は出来たものの、デコボコザラザラで特に5歳児は気に入らない。目指すはピッカピカのチョコ団子！この時点で砂団子を土台として、もっと細かい砂やサラサラの土を表面にコーティングしていく手法が主流になってきた。うっかり落として割れてしまった団子が内部と表面で2層に分かれていたことから気付いている。</p> <p>サラサラの砂を手のひらに付けて...</p>   <p>手のひらに付いた細かい砂だけを付ける</p>

事例3：光りはじめた団子

子どもの言葉、気付き	状況
<p>「下駄箱にしまっておいてお昼食べたならまたやる！」 「(乾いて)カピカピになっちゃった」 「砂持って帰って家で続きやるんだ！」 「ビニールに入れると明日も出来るよ」 「手で磨くよりビニールで磨くと光るよ！」 「いっぱい擦ったら顔が映るよ」</p>	<p>保管用のビニール袋のほうが手よりも滑らかであり、すべすべしたもので磨くと団子が輝く、ということを発見した子どもたち。「タオルで擦るとピッカピカになるよ」「手袋で優しく擦ると凄く光るよ」「うちのママはスプーンで擦って怒られたんだって」と子ども同士で情報交換し合っていた。</p>

事例4：団子、燃やしたら無くなる？ <焼成>

宝物のように大事な団子を見つめる子どものつぶやきの中で、「団子、燃やしたら無くなる？」「チョコレートみたいにドロドロになるのかな？」といった疑問に応え、七輪を使って焼成してみることにした。

七輪をはじめて見る子どもも多く、「火が出てないのに熱い！」「お肉とかも焼ける？」職員の「ずっと昔はこれを使って料理もしたんだって」という声掛けに、興味津々で見つめていた。

1回目の焼成では砂+土のコーティング団子のためか、表面と内部の膨張率に差が出来、割れてしまい、失敗に終わった。

2回目は、子どもたちが作った砂、赤土、陶芸用粘土団子を表面にコーティングせずソリッドな状態で、それぞれ用意し加熱してみる。

いくつか焼いたのだが、内部に空気が入っていたものもあり、焼いている途中で爆発したものもあった。



真っ赤になってきたよ



左から砂、赤土、陶芸用粘土で作った団子

砂は触ると崩れるほど脆く、赤土はひび割れは生じたが焼成前とは比較にならないほど固くなった。

左側は比較用に用意した陶芸粘土だが、素材の違いによって焼きあがりの色や硬さの変化にも子どもたちは驚いていた。

結果、子どもたちから「チョコレートになんなかったけど鉄団子（鉄のように固い）になったね」



ツルツルが割れていく！

<考察> 泥団子作りでは試行錯誤が繰り返される。どうしたら固まるか、何を使ったら輝くのか。子どもが自分で考え、時には友だちからの情報を参考により良いもの、自分が満足するものを作り上げていく。まさに大人の研究者と同じ営みではないだろうか。

また、団子は脆く、力の加減によってすぐに壊れてしまう。壊れたら止めてしまうのではなく、何度崩れても諦めずに作り直し、チャレンジする姿が見られた。ある子どもは、ビニール袋に保管すると乾燥しない、という方法を見付け、数ヶ月にわたり、ひとつの団子を磨き続けていた。

みどころ

子どもたちの言葉や様子を細やかに記録することは、保育を振り返る大切な手掛りになります。記録をして保育を振り返ると、様々な側面や分析が見えてきます。こうして得たことを手掛りにすることで、子どもたちに寄り添いながら保育を進めていくことを期待することができます。この事例では、子どもたちの「チョコレートのような泥団子」という思いを大切に育て保育されたことが、「チョコレートになんなかったけど鉄団子（鉄のように固い）になったね」という最後の言葉で分かります。子どもたちは自分たちの思いを追求していくことで「科学する心」が生まれ、納得する結論を得ることができ、満足していることも伝わります。